

# 傘の歴史と民俗 2

## — 傘堂から傘亭へ —

段 上 達 雄

### 【要 旨】

中世以来の傘型建造物が信仰のための堂宇から、茶室や庭園の四阿が派生してゆく経緯を明らかにすると共に、その淵源となる傘塔婆について考察する。

### 【キーワード】

五智堂 傘堂 一本堂 笠塔婆 傘亭

## はじめに

鹿谷勲氏から報告書『傘堂』の恵贈を受け、当麻の傘堂の存在を教えられて衝撃を受けたことがあった。彼は奈良県における民俗学を深化させた人物であり、私の少年期の友人でもある。

鹿谷氏が執筆した『傘堂』第一章「傘堂の歴史と民俗」によれば、その傘堂は豊後国とゆかりのあると考えられる吉弘統家が建立したもので、傘型の建造物が存在することすら、それまで全く知らなかったからである。それ以来、歴史民俗学的に傘の研究をする中で、傘型建造物の情報を収集し、実際に現地調査も行ってきた。傘型堂宇の新たな知見を得て、また庭園での傘型四阿の存在を確認し、本論文を書くに至った。その契機と基礎となったのは鹿谷氏の論文であり、深く鹿谷氏に感謝したい。

## 1. 傘型建造物

### (1) 傘型堂宇

傘型堂宇では支柱上部に厨子や梵字を彫った額などを設けて仏菩薩を祀ったり、床上などに石仏を安置する。傘型建造物として屋根と一本柱を重視し、塔建築であると共に仏菩薩を覆う傘蓋という意識のもとで建造されたと考えられる。傘型の堂宇は数は少ないものの、奈良県、広島県、岡山県に分布する。いずれも宗教施設であり、広島県の敷地の一本堂と龍興寺一本堂では柱下部に腰掛けを設けて休息の場である辻堂としての役割も担っている。奈良県の長岳寺五智堂もかつては腰掛けがあった。さほど大きくはない堂宇であるが、人々の暮らしに溶け込んできた建物である。

#### ①長岳寺五智堂

奈良県天理市柳本町239番地に長岳寺管轄の五智堂が建っている。奈良から初瀬に向かう上街

道(上ツ道・初瀬街道)と長岳寺の参道とが交差する所で、東に850mほど離れて、天長元年(824)に弘法大師開基と伝える高野山真言宗長岳寺がある。五智堂は方一間の建造物で、本瓦葺きの単層宝形造の屋根を載せる。四方に壁はなく、吹き放ちになっており、中心に太いケヤキの丸柱を建てる。そして四隅に細い角柱を建て、長押、桁、頭貫、腰貫を組んで、張り出した屋根を支えている。心柱の下部には補修痕とほぞ穴が残されている。五智堂は基壇面からの全高約6.4m、屋根は約5.4m角で、軒先高は約3.5mある。傘堂の基壇は一段で、粗く成形した石で囲っている。太い心柱の上部四面には、心柱から受け木を出して縁飾りをつけた扁額を取り付けている。扁額にはそれぞれ葉研彫りの梵字を刻み、梵字の下には蓮華座を象った木製の彫刻を貼り付ける。東は梵字ウンで阿閼如来、西は梵字キリクで無量寿如来(阿弥陀如来)、南は梵字タラクで宝生如来、北は梵字アークで不空成就如来(釈迦如来)を表し、心柱を大日如来(梵字だとバン)に見立て、金剛界五仏を表す。密教において五智如来は金剛界五仏ともいい、阿閼如来は「大円鏡智」、無量寿如来は「妙観察智」、宝生如来は「平等性智」、不空成就如来は「成所作智」、そして大日如来は「法界体性智」という、5つの智恵を表している。



長岳寺五智堂

善無畏三蔵(インド出身、来日伝説がある)が奈良時代に建てたという伝説があるが、大仏様式の頭貫木鼻等から、鎌倉末期頃の建立と考えられている。現存する傘型木造建造物では最も古い。寛政3年(1791)刊行の『大和名所図会』では、南北に延びる初瀬街道から東側に少し離れた所に建つ「傘塔(五智堂)」を描いている<sup>(1)</sup>。この絵は街道からの西北からの視点で描いており、当時は街道沿いの集落北端に五智堂が建っていたことを教えてくれる。奈良から南下する人々の目に、五智堂の特異な姿が飛び込んできたであろう。

暁鐘成の『雲錦随筆』巻之一に次のような記載と挿絵がある<sup>(2)</sup>。「大和国城上郡柳本村の北の端にも右に類せし堂あり。然れども是は中央に太き柱一本立たり。故に土人傘堂と号く。心柱の上に額の如く縁を取たる物を四方より囲みたり。土人の伝説種々ありといへども審ならん。按ずるに往昔釜口長岳寺(此傘堂より東八丁ばかりにあり真言宗開基弘法大師境内美景なり)の寺境広かりし時の堂宇の遺跡ならん(以下略)」

「和州柳本傘堂の図」と題した挿絵を見ると、五智堂は方形造りの本瓦葺きだが、心柱を太い四角柱で表し、四隅の小柱の間には床を張っている。これが現状との大きな違いで、現在、心柱下部に残るほぞ穴は床を張っていた頃の根太の痕跡と推測される。周りには旅人6人を描き、その中の1人は床下の心礎を屈み込んで覗いている。そして、子守の女兒が隅の角柱によじ登っている男児に声をかけている。そして、図の右上に「心柱の上図の如し」と2方面の額を描き足している。暁鐘成(1793-1861)は大坂の浮世絵師で戯作者でもあり、没後の文久2年(1862)に『雲錦随筆』が刊行されている。



和州柳本傘堂の図『雲錦随筆』

大正3年(1914)に奈良県が編纂した『大和志料』には「真面堂 釜口ヨリ柳本ニ至ル辻ニアリ、俗に『マメ堂』ト称ス『マメ』ハ真面ノ略ニシテ四方共ニ正面ナルノ義ナリ、毎面梵字アレトモ剥落シテ分明ナラス、長岳寺ノ伝説ニ養老中善無畏三蔵ノ建立スル処ナリト云」と記されている<sup>(3)</sup>。

いずれにせよ、五智堂は旅人などの休息の場である辻堂として、人々から傘塔、傘堂、真面堂、マメ堂などと呼ばれて親しまれていたと思われる。しかし、本来は五智如来を祀る堂宇で、屋根は傘蓋の一種として意識して建立したのであろう。また人通りの多い街道の傍らに、このような人目を引く傘型の堂宇をわざわざ造立したのは、五智如来の宗教的普及を図るためだったと推測される。

## ②当麻の傘堂

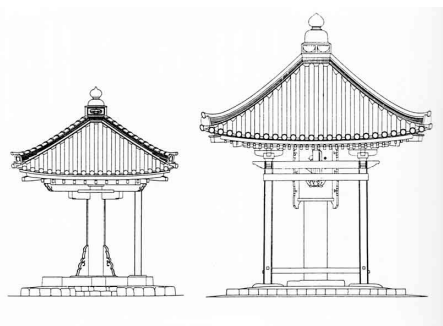
二上山の山腹の奈良県葛城市染野726番地に「傘堂」と呼ばれる傘型堂宇が建っている。当麻寺の北西約500mの地点にあり、当麻から大阪に抜ける岩屋道という古い往還の傍らにある。この岩屋道を登ってゆくと、二上山雌岳の南側の岩屋峠に向かう。傘堂の反対側には『西国三十三所名所図会』に「当麻十七ヶ村の生土神」と記された当麻山口神社の参道入口の鳥居が立ち、傘堂北西には大池という水田灌溉用の溜池がある。傘堂の敷地は700㎡ほどあり、周囲にやや菱形に四角く空堀を巡らす。西南隅には空堀はなく、ここを通って岩屋道から敷地内に入り出ることができるようになっている。敷地は約22m四方の広さで、その中央に傘堂がやや北側に振って東向きに建っている。傘堂は基壇面からの全高4.44m、屋根は4m角で、軒先高は2.3mある。傘堂の基壇は二段になっており、下段の基壇は高さ20cmほどの自然石を葛石として用い、上段の基壇は四角く成形した花崗岩を組んでおり、二重基壇の高さは45cmほどである。

屋根は一重宝形造で、本瓦葺き、最頂部には露盤を据えて宝珠を載せ、露盤も宝珠も瓦製である。隅棟の先は鬼瓦仕舞である。傘堂中央の真柱は1尺4寸(約42cm)角のケヤキ材を用い、上下二重に据えられた花崗岩製の礎石に立てられ、礎石上端からの高さは2.85mある。真柱の4隅足元には対角線状に線形を施したケヤキ製の添板をつけ、真柱上部の四隅には同様に対角線上に男梁、それを支える短い女梁を取り付けている。真柱の北側70cmほど離れた所に、17cm角の控柱を梵鐘を支えるために立てている。また、真柱上部の東面に阿弥陀如来像を祀っていた厨子を取り付けている。

この傘堂は延宝2年(1674)11月に建立されている。延宝2年銘の傘堂の棟札には「長徳院殿位牌堂」と記されている。「長徳院殿前拾遺泰誉迎和道永大居士神儀」と印刻された位牌は、今でも傘堂の周辺の3寺院、明円寺(新在家・浄土真宗本願寺派)、観音寺(今在家・浄土宗)、石光寺(染野・浄土宗)の住職が交代で世話をしている。長徳院殿道永大居士とは郡山藩主本多政



当麻の傘堂



当麻の傘堂と長岳寺五智堂の図  
『傘堂』奈良県教育委員会より



勝(1614~1671)の戒名である。

傘堂の梵鐘の銘文の最初に「道永居士影堂鐘銘併□」、最後に「願主吉弘統家」と記されている。本多政勝は寛文11年(1671)10月に死去しており、この傘堂は没後3年目に政勝の菩提を弔う「影堂」「位牌堂」、いわゆる供養堂として建てられたのである。

この傘堂の建立の中心となったのは吉弘甚左衛門統家という人物である。「内記政勝公御家中分限帖」によれば、足軽組頭として二百二十五石の知行を取る郡山藩の家臣であったという。吉弘統家は苗字と統という排行から、豊後の石垣原の合戦で戦死した吉弘統幸の一族と思われる。統家の戦死後に吉弘家は離散し、子孫の一部は柳川立花家などに仕えたが、一族の動向は不明な点が多く、吉弘統家がどのような係累であるかはわからない。

當麻寺には浄土変相図のひとつである「当麻曼荼羅」の根本曼荼羅が伝わる。これは中將姫の伝説を伴う蓮糸曼荼羅であると呼ばれてきた。當麻寺は阿弥陀信仰の聖地のひとつであり、その近くに吉弘統家は主君の冥福を祈る傘堂を建立したのである。

この建立の経緯を梵鐘の銘文等を通して少したどってみたい。銘文に「居士没後、統家恋王の私情に勝ちえず(中略)善地を扱ひ、以て影堂を營建す」という一文がある。また、建立のために「墾田一千二百歩(約3960㎡)、山林二千八百歩(約9240㎡)」を購入して「司鑰者しりんに(給)す」と記されている。この田と山林を鑰(かぎ)を司る者、すなわち傘堂の管理者に給すというのである。司鑰者は野口の富豪速水正家と染野村の下村正秀であった。この梵鐘には寛文10年(1670)と記された「新池記」と題された銘文も彫られており、最初に「和の葛下郡の新池は吉弘統家が創開せし所也」と記されている。新池とは傘堂の北西の大池のことで、吉弘統家が干魃しんぱに苦しむ染野・今在家・新在家の農民のために新たに池を築造したのだという。この地は吉弘統家の知行地だったのであろうか。

傘堂の西北側に2基の墓石が建てられている。傘堂に近い向かって右側が統家の墓石で、自然石の正面に「寿弘院法眷西願居士 元禄九年(1696)八月廿日」、右側面に「俗名 吉弘甚左衛門之尉統家」と刻まれている。向かって左側の墓標は藤懸氏玄達の尖頂位牌型墓石で、正面に「豊後国住 藤懸氏玄達 延宝六年(1678)戊午十一月八日」と刻まれ、名前の下に蓮華座を彫り出す。「統家同郷里玄達、衆を請勸して之を助く」とあり、豊後出身の藤懸玄達は、大池築堤に協力した人物ということで、共に祀られているのであろう。

大和郡山藩本多家は後継問題でもめ、政勝の養嫡子政長の没後、延宝7年(1679)に政長の子忠国は陸奥国福島、政勝の子政利は播磨国明石へにそれぞれ移封された。鐘銘や墓碑銘を見ると、新池の築造は移封の9年前で、移封後20年を経て吉弘統家は亡くなっていることがわかる。本多家移封時に統家は致仕して、染野近辺に居住するようになったのであろう。

毎年9月1日の八朔(本来は旧暦8月1日)の日に、大池の灌漑範囲である新在家、染野、今在家の3大字の役員たちが傘堂に集まり、統家らの墓前に祭壇を設けて、郡山藩主本多正勝公の位牌を安置して「オイケ(大池)の施餓鬼」、あるいは「傘堂の施餓鬼」と呼ばれる法会を営む。本来、施餓鬼供養は先祖への追善として盂蘭盆会に催されることが多く、非業の死を遂げた死者供養として行われることもある。また、八朔は室町期から江戸期の武家社会では、臣下が主君に贈り物をする日であり、民間では「田の実の節供」といって、稲穂が稔り始める頃の豊作祈願をする日でもある。吉弘統家、藤懸玄達、そして郡山藩主本多政勝の3人は、大池築造に大きく関わった人物として、今も供養されているのである。

政勝の供養堂として建てられた傘堂は、地域の人たちによる独特な信仰の対象にもなってきた。毎年5月14日、當麻寺で一般には「當麻レンゾ」と呼ばれて親しまれている「二十五菩薩來迎会」を催す。この日には多くの参拝者が傘堂を訪れ、その大半は女性である。般若心経を唱え

ながら、身体前部を傘堂の真柱に接し、次に背を向けて、柱の周りを正面の東から南、西、北へと右廻りに3回巡り、最後に願い事が叶うように逆方向の左廻りで1回巡る。混雑しないように、傘堂の周辺の明円寺・観音寺・石光寺の住職が交代で世話をしている。この時、「無病祈願」「正念祈願」「晴明祈願」「神祇祈願」という4種の傘堂の朱印を下着や代わりに晒し布などに押印してもらう。これを持って真柱を巡り、家に持ち帰って布団や枕の下に敷いておくと、患わずに家人に世話をかけることもなく往生できると信じられ、毎年ひとつずつ朱印をいただき、4年かけて一通りの願をかけることができるという。

### ③茅原の笠堂

奈良県御所市茅原の吉祥草寺門前に笠堂と呼ばれる小堂がある。茅原は修験道の開祖役小角の生誕の地と伝え、本山修験宗吉祥草寺は役行者の開基と伝える古刹である。傘堂は吉祥草寺の参道を南下し、東西に延びる豊年橋通りとの三叉路の北西側に東面して建っている。方一間の小さな堂宇で、外観上は他の小堂となんら変わりはない。屋根は一重宝形造で、本瓦葺き。最頂部には瓦製の露盤と宝珠を載せ、隅棟の先は鬼瓦仕舞である。壁は軒下が漆喰壁で、他は板張りの土壁となっている。正面の扉を開けると、笠堂と呼ばれる理由が判明する。堂の中央に直径40cmばかりの12面体のケヤキ材の木柱が立ち、その最頂部から四隅の柱に桁が架けられ、桁から垂木が伸びている。内部は傘に似た構造なのである。木柱左前の床上には石造地藏菩薩立像、右手には厨子を祀っている。

堂正面左に「地藏堂（笠堂）伝説」という標題の説明額を掲げている。そこには「西暦六五五年頃、役行者が葛城山（現在の金剛山）への修行の途次、近くの農民が折からの暴風雨のため田植えもできずに困っていた。その姿を見て、自ら進んで農民にまじって田に入られたところ、不思議と風雨も止み、夕刻までに田植えを終えることができたとのことである。それ以来、行者の徳を慕い、行者が笠を脱いだ場所に地藏菩薩尊を安置する堂宇を建立し笠堂と称えたという。堂の中央には太い円柱があり、全体が笠を立てた様式であるためこういうなり。また、一説に一五九〇年頃（天正年間）、笠堂修復が成り、竣工の供養をした際、

一人の見馴れぬ巡礼者が通りかかって供養されたが、あとでそれは、明智光秀の娘さんであったという伝説がある。また、婚礼の花嫁さんが、この笠堂の前を通る際には、堂に目かくしをする風習が、今も残っている」と記されている。また、堂内に木製札が護符が立てかけられていた。最上部に梵字「カ（地藏菩薩）」を書き、「奉修地藏盆供町内安全人類和合祈攸令和元年八月廿四日茅原山吉祥草寺」と記されている。今なお吉祥草寺住職が地藏盆の法会を行っており、地域の篤い信仰を集めているようである。



茅原の笠堂外観



茅原の笠堂の内部

#### ④敷地の一本堂

広島県三次市吉舎町敷地の農免道路から少し離れた旧道沿いに「一本堂」と呼ばれる傘型堂宇が建っている。その一本堂の東側の斜面は墓地となっており、あたかも墓地の入り口を示しているかのようである。屋根は宝形造で、ガリバリウム鋼板で覆っているが、かつては茅葺きであった。心柱は花崗岩製の八角柱で、その上部に木製の短い八角柱の心柱が載り、その木製心柱の中程に対角線状に組んだ腕木を組み、その先で桁を受ける。木製心柱上部と腕木の接合部に隅木を組み込み、疎ら垂木を並べ、その上に板を張る。木製心柱には繰形付きの持送りを腕木を支えるように四方に組み、持送りの下部は花崗岩製心柱まで伸びて挟み込み、屋根等の上部を固定するようになっている。本来、心柱はすべて木製だったと思われるが、風雨に晒されて腐朽したため、下部を花崗岩製の心柱に置き換えたものと推測される。令和2年



敷地の一本堂

(2020)、地元住民で組織している敷地一本堂保存会は、三次市の補助金を受けて、屋根の朽ちたトタン板をはがして木材で補強し、耐久性の高いガリバリウム鋼板で覆い直している。花崗岩製心柱の下部には平面六角形の腰掛けが設けられ、地藏石仏が切り抜いた床面にはめ込まれたような形で安置されている。一本堂は全高約4.5m、軒先まで約2.2m、屋根は約3.6m四方である。一本堂はやや傾斜のある場所に建立されているため、最下部は荒積みの石壇で水平を創り出している。腰掛け部の高さ62cm、六角形の一边は80cm、花崗岩製心柱は八角柱で太さ30cm角の角柱を削って八角柱にしたと思われる、基壇からの高さは120cmほどである。重心が高い一本堂の屋根を支えるため、心柱を地中深く埋けていると思われる。

『吉舎町史』にコラム「伝説・一本堂物語」が掲載されている<sup>(4)</sup>。「大永二年(1522)、尼子氏が南天山城を攻めたとき、(尼子)経久の叔父貞久は敷地の大楽寺に参詣し、『このたびの戦いに勝たしめたまえば、われ当寺に山門を寄進せん』と戦勝祈願した。やがて南天山城が陥落したので、貞久は単騎大楽寺へお礼参りに行ったが、南天山城の家老、加板原佐渡守は一武将に意を含めて、ひそかに敷地片野の毘沙丸山で帰途を待ち受けて、弓で貞久を狙撃させ、ついに貞久はここであえなく最期をとげたという、このとき、狙撃の命を受けた武将は、まず馬の脚三本をつぎつぎと射てその自由を奪ったが、残った一本脚で馬はここまでたどりついてついに倒れ貞久は討ちとられてしまった。村人たちはこの馬と貞久を弔うために一本柱の「一本堂」を建立し、今もそのあたりの地名を一本堂という。『一本堂』のすぐ近く丸草山に苔むした宝篋印塔があり、尼子貞久の墓と伝える。(以下略)」

もう少し、当時の状況について補足しておきたい。南天山城は和智氏初代資実が14世紀中頃に現在の吉舎庁舎西側、馬洗川を隔てた標高348mの丘陵上に築城したもので、和智氏はここを拠点とするようになる。戦国期には和智氏は大内氏に属していたが、大内氏と尼子氏との対立の中で備後国は攻守入り乱れる情勢下となった。大永2年には尼子氏が南天山城を攻め、敗れた8代目智豊郷は尼子氏に降り、一本堂はこの時の戦いに由来するというのである。貞久の墓と伝える宝篋印塔は、敷地一本堂から農免道路を挟んだ南側の丸草山にある。ただし、『吉舎町史』のコラムによれば、尼子氏系図には尼子貞久の名は見られないという。なお、大楽寺は三次市吉舎町敷地にある真言宗寺院で、一本堂の南方約1.4kmの山中にある。このことから、敷地一本堂は

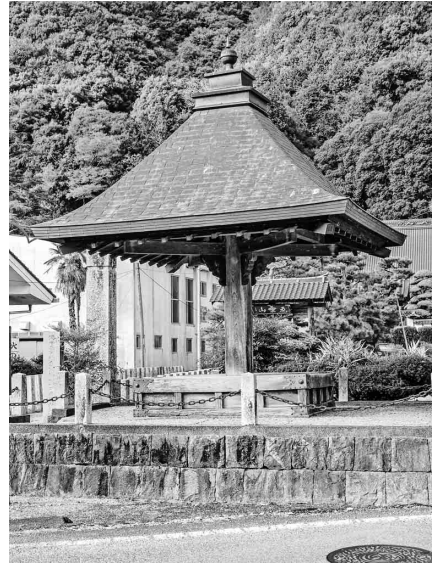


この地域に多く残されている辻堂としての性格を持ちながら、地元の人たちは伝説から尼子貞久の供養施設としての性格を強く意識してきたものと思われる。

#### ⑤庄原の龍興寺一本堂

広島県庄原市惣領町稲草の龍興寺門前に一本堂と呼ばれる傘型堂宇が建っている。南北軸の参道が東西軸の県道78号線と接する三叉路の東北側に位置する。この堂は参道に面して東側にあり、西側の参道側を正面とする。

龍興寺は地頭長井氏が臨済宗寺院として大覚禪師（蘭溪道隆・1213-1278年、1246年に南宋から来日）を招いて開基し、五雲山龍興寺と名付けられたと伝える。貞和3年（1347）に寺領百貫文を受け、長井氏の菩提所となった。しかし、近世初頭に長井氏が長州に移封した後、慶長18年（1613）に仏蓋禪師を開山として曹洞宗寺院となり、現在に至っている。寺伝では天平年間（729-749）に行基菩薩が当地に訪し、桑の大木があることを奇とし、その桑の木を用いて観音菩薩像（秘仏雷除観音像）を刻んで観音堂に祀り、その残り材で桑の大木が立っていた所に一本堂を建てたという<sup>(5)</sup>。



龍興寺一本堂

現在の一本堂は桑の木を用いた建築ではない。屋根は銅板葺の宝形造で、最頂部は二重露盤に宝珠を載せる心柱は9寸（約27cm）角の隅切りの太いケヤキ材で、心柱上部の対角線状に組んだ腕木で桁を受けて隅木を組み込み、腕木を練形付きのケヤキ製の持送りで支える。腕木や垂木の先端にも銅板の飾り金具をつける。その正面心柱上部に棚を設け、地藏菩薩立像を安置する厨子を据える。心柱下部に腰掛けを設け、上下に框をめぐらせ、四隅に隅金具を打ち、上面に床板を張る。

この龍興寺一本堂は高さ55cm、幅・奥行き共に5mの側面石積み、上面コンクリート張りの基壇の上に建ち、西側に階段を設けている。一本堂本体は高さ約4.7m、軒先まで2.1m、屋根は3.5m四方で、腰掛け部は高さ45cm、幅奥行き共に195cmある。

#### ⑥高梁の唐傘堂

岡山県高梁市落合町原田に唐傘堂という傘型建造物がある。備中高梁駅の西北西約2.5kmの地点にあり、高梁川を渡って県道302号線（宇治鉄砲町線）の急坂を登りきった、真似男ヶ峠手前の道沿いに建っている。すぐ近くに備北バスのバス停唐傘堂がある。

唐傘堂は薄茶色に塗装された薄鉄板で葺いた宝形造で、最頂部を鉄板製の二重露盤に角のある宝珠型を載せる。心柱は四角い石柱で、石柱上部の対角線状に組んだ腕木で桁を受けて隅木を組み込み、桁に垂木を載せて屋根下地の板を張る。高さ110cmほどの所の孔に鉄棒をはめ、斜めに伸ばして腕木を支えている。全高は約3.4m、軒高約2m、屋根は3.05m四方ある。石柱は三方に銘文を刻んだ花崗岩製で、コンクリートの土台で補強している。石柱は床からの高さが255cmで、幅28.5cm、奥行き25.0cmあり、土台は高さ20cmで、幅57cm、奥行き61cmである。土台上に石造地藏菩薩立像2体を祀る。石柱正面の銘文は「御成婚記念」、右側面には「大正十二年八月再興」

と彫られている。左側面上段には「奉願主深井寺若林仙巖／松石材上田武一郎／管理者落合村仲田建夫／高梁村庄直温」、同下段には「事業担任旧字川乱共和會／喜捨主御芳名一々刻ス／ル煩ヲ□ケ別記扱有／ニ□シ以テ□右□志ヲ謝之」と記されている。

石柱の銘文から、この石柱を用いた堂宇は大正12年(1923)8月に建てられ、それも再興である。翌大正13年1月27日に当時の皇太子(後の昭和天皇)が結婚されており、それを堂宇再興に合わせて事前に祝賀しようとしたものであろう。ただし、それ以前の堂宇が傘型建造物だったかは不明である。この時再興された堂宇は、中心となる石柱が残されていることから、傘型建造物であったことは間違いないだろう。願主は深井寺若林仙巖となっているが、この深井寺とは、唐傘堂から西北1.2kmにある曹洞宗の瑞源山深耕寺(落合町原田川東)のことで、花崗岩に彫った銘文のため、耕を井に略していたのである。上田武一郎という人物が、建築材の石材と松を寄附し、落合村と高梁村の人が管理者であった。事業担任は旧字川乱共和會であるという。この川乱かわみだれとは、南流する高梁川の西側で、高梁川支流の成羽川北方の地域のことである。川乱北部は真似男峠から西側の地域で、標高300mから400mを越す山間部となる。真似男峠から急坂を下って高梁川を渡ると、すぐにJR備中高梁駅に至る。この川乱の人たちで組織された川乱共和會が、唐傘堂の建築の中心となっていたのである。



高梁の唐傘堂

また、軒下には寄付者名札が打ち付けられていた。それには「堂宇改築竣工／時 昭和三十一年八月再建／事業担当川乱共和會／喜捨主御芳名敬称略(以下略)」と記されている。昭和31年(1956)8月に現在の唐傘堂を再建したというのである。そして、事業担当は川乱共和會で、大正期の石柱を再利用して再建している。また、川乱共和會が多額の資金を拠出しているが、寄付者には高梁町の商人や有力者の名をつらねている。

唐傘堂の傍らに住む渡辺武男氏によれば、戦前、原田などの川乱の人たちは真似男峠の唐傘堂の所で、備中高梁駅に向かう出征兵士を見送ったという。

## (2) 笠塔婆から傘型堂宇へ

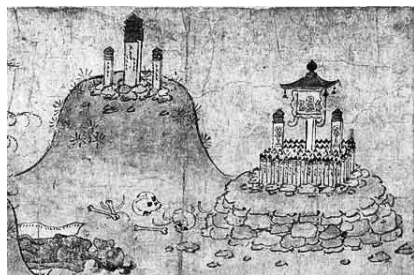
『吾妻鏡』文治5年(1185)9月17日の「関山中尊寺事」に「清衡管領六郡之最初草創之。先自白河関。至于外浜。廿余日行程也。其路一町別立笠率都婆。其面図絵金色阿弥陀像」と記されている<sup>(6)</sup>。奥州藤原氏初代の藤原清衡(1056-1128)が、白河の関(福島県白河市)から外の浜(青森市)までの街道一町ごとに金箔押しの阿弥陀如来像を描いた笠塔婆を建てたというのである。平安末期に東北において膨大な数の木製笠塔婆が建立されていたのである。これは前九年の役と後三年の役での戦死者や犠牲者の供養塔として建てられたものだろう。それでは笠塔婆とは具体的にどのようなものだったのかを見ていきたい。

### ① 餓鬼草紙に描かれた笠塔婆

『餓鬼草紙』は鎌倉初期に描かれた六道輪廻の餓鬼道を主題とした紙本著色の絵巻で、東京国立博物館所蔵の旧河本家本(東博本)と京都国立博物館所蔵の旧曹源寺本(京博本)が現存する。



東博本の餓鬼草紙に描かれた木造笠塔婆は、墓地で徘徊する間塚餓鬼の場面に登場する。石積み塚の上に細い五輪塔婆をぎっしりと四角く建て並べ、その囲まれた区画の中央に木製笠塔婆と左右に木製五輪塔婆を建てている。五輪塔婆上部の五輪部は黒く塗られている。笠塔婆は角柱の上部に阿弥陀三尊を描いた額をつけ、宝珠を載せた宝形造屋根を被せ、屋根の四隅から風鐸を下げる。墓標としての役割を持つ笠塔婆である。



木製笠塔婆『餓鬼草紙』東京国立博物館蔵

京博本の餓鬼草紙では食水餓鬼の場面に木造笠塔婆を描いている。笠塔婆は盂蘭盆会で賑わう寺院の門外に建ち、太い四角柱の正面上部に阿弥陀三尊を描き、その像の下部左右には櫓を挿した竹筒を取り付けている。柱には黒塗りの宝形造屋根を載せ、屋根の四隅には風鐸を吊り下げる。屋根の支えと尊像を荘厳するため、角柱上部隅に額縁状の添板をつけている。笠塔婆の根元近くに、曲物桶から水を注ぐ男と女や数珠を手合掌する尼などを描く。人には見えない、痩せ細って腹部だけ肥大した餓鬼が、手向けられた水をなめてわずかに命をつないでいるという悲惨な情景である。墓標だとする見解もあるが、死穢を厭う時代の風潮から考えると、この笠塔婆は供養塔と考えて良いだろう。



木製笠塔婆『餓鬼草紙』  
京都国立博物館蔵

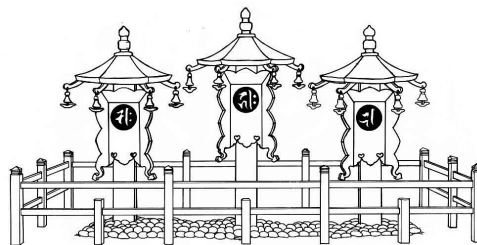
餓鬼草紙によって、笠塔婆の形態と役割とにそれぞれ2種類あることが分かる。形態的には、東博本のよ

うな細い支柱の上部に額をつけて屋根を載せるタイプの笠塔婆と、京博本のように太い四角柱上部に尊像を描いて屋根を載せるタイプの笠塔婆との違いである。そして、東博本の墓標としての笠塔婆と京博本の供養塔としての笠塔婆という機能的な違いも見て取れる。その違いはその後も受け継がれ、京博本笠塔婆の形態は石造笠塔婆に大きな影響を与えたと考えられるのである。

## ②遺跡出土の木製笠塔婆

石川県珠洲市の野々江本江寺遺跡から平安末期の木製笠塔婆の竿2点と扁額1点、それに木製板碑が出土している。平成18年度(2006)から19年度に実施された県営圃場整備事業に伴う発掘調査での出土品で、笠塔婆の竿はスギ材で、扁額はアスナロ材であった。

木製笠塔婆の竿1は背面に溝を彫り、頂部に笠にはめる柄を作り出し、下部は切断されている。高さは190.6cm、幅17.9cm、厚さ13.3cmである。竿2は頂部が腐朽して欠損するが、下部は遺存している。高さは207.0cmで、幅15.7cm、厚さ12.0cmである。木製笠塔婆の扁額は竿1に装着されていたもので、下部は花卉形に整形され、高さは69.5cm、幅19.4cm、厚さ2.0cmである。扁額を柱に装着するタイプの木製笠塔婆である。木製笠塔婆の出土例としては全国最古級である。



千田北遺跡出土木製笠塔婆復元図

平成30年(2018)、13世紀頃(鎌倉前期)の木製笠塔婆が金沢市千田町の千田北遺跡から出土した<sup>(7)</sup>。幅約4m、深さ約1mの堀跡からばらばらになった部材27点を金沢市埋蔵文化財センターが発掘したのである。部材の保存状態は良好である。東博本の餓鬼草紙に描かれた木製笠塔婆と同系列の形態で、支柱上部に扁額をつけて笠を載せる。3基の木造笠塔婆が復元でき、支柱こそ出土しなかったが、全高は約2.5mと考えられている。額縁を含むそれぞれの扁額全体は縦約1m、幅約60cmあり、厚さ約2cmのスギ材で作られ、額面と額縁は鉄釘で斜めに固定する。額上部には円相を彫って黒漆を塗り、その内部に梵字を葉研彫りして金箔を貼るその他の部分を白く塗っていた痕跡がある。額縁両側下部は脚のように伸び、額下端部にはハート形の猪目を2カ所削り抜いている。額縁両下端に突出した脚は、東博本餓鬼草紙の笠塔婆と同じである。額面の梵字はそれぞれキリーク(阿弥陀如来)、サ(観音菩薩)、サク(勢至菩薩)で、3基の笠塔婆の組み合わせによって阿弥陀三尊を表している。笠(屋根)は六角平面で最頂部に露盤と宝珠を載せ、棟先に蕨手型の腕木を出して木製の風鐸と風招を吊していた。このような飾りによって、この笠塔婆は建築として意識されていたと考えられる。なお、木製笠塔婆付近から、柱や杭を立て並べて横に貫を渡しただけの柵である釘貫の部材や拳大の石が出土しているため、地面に石を敷き並べて周囲を釘貫で囲っていたと推測されている。

野々江本江寺遺跡と北千田遺跡出土の笠塔婆は、東博本餓鬼草紙と同系統の木製笠塔婆の初めての出土例である。ただ、餓鬼草紙のものが小形であるのに対して、この両遺跡出土の木製笠塔婆は大きい。北千田遺跡には当時の墓地があることから、有力武士の墓標とも考えられるが、木造笠塔婆としては規模が大きいので、墓地の中心となる供養塔と推測することもできる。供養塔としての笠塔婆から、傘型建造物が発生したと考えられるのである。

### ③石造笠塔婆の系譜

令和元年(2019)、京都市東山区の鳥野辺推定地から日本最古の石造笠塔婆が出土したという発表があった。鳥野辺の範囲は明確な定義はないが、鴨川東方の六波羅蜜寺から三十三間堂間での発掘調査で、周囲に溝が巡る一辺約9.2mの方形区画の墓跡が出土し、遺構の位置関係から11世紀前半に貴族が敷地を占有して計画的に配置した墓とみられ、藤原氏等の上流貴族の可能性が高いという。笠塔婆は墓前に置かれていたと推測され、粗製の凝灰岩製で、竿と六角形の笠がある。全高は約1.8mと想定されている。竿には經典の納入孔と思われる彫り込みがある。この墓を基点に整然と並ぶ形で12世紀前半までに築かれた墓6基も出土した。その後、平清盛が一門の本拠地六波羅としてその地域を整備されたため、墓地は破壊されたという。

紀年銘が明確に分かる伝世品の石造笠塔婆では、熊本市中央区坪井の本光寺笠塔婆が最も古く、安元元年(1175)の銘がある。笠などは後補で、高さ95cmで33.5cm角の竿部(塔身)が残存する。西に面した竿部正面上部の蓮華座上月輪内に阿弥陀の種子「キリーク」を刻み、下部に「奉造立笠塔婆一基 安元元季(1175)乙未、十月五日 丙午(佛師長昭)」という銘文を刻む。北面に金剛界大日の種子「バン」、塔身背後東面阿闍如来の種子「ウン」、南面に宝生如来の種子「タラク」を葉研彫りで刻む。凝灰岩製の竿部は水磨きされて朱色に塗られ、種子は黒く彩色されている。残念ながら、当初の笠は欠失しており、建立当初の全体像は良くわからない。

次に「平安・鎌倉期の有銘石造笠塔婆」の表を掲載する。これらをすべて紹介できないが、笠と竿部が保全され、創建当初の姿を伝えているとみられる、大分の富貴寺と奈良の般若寺の石造笠塔婆を紹介してみよう。

表：平安期から鎌倉期の有銘石造笠塔婆

造立年	名称	所在地	材質・文化財指定
安元元年 (1175)	本光寺笠塔婆	熊本市坪井	凝灰岩・県指定
建久4年 (1193)	円台寺笠塔婆	熊本市植木町円台寺	凝灰岩・県指定
建久7年 (1196)	円台寺笠塔婆	熊本市植木町円台寺	凝灰岩・県指定
承元2年 (1208)	如法寺石造笠塔婆	福島県郡山市堂前町	凝灰岩・国重文
貞永元年 (1232)	護国寺笠塔婆	山口県防府市本橋町	凝灰岩・県指定
仁治2年 (1241)	富貴寺阿弥陀三尊種子笠塔婆	大分県豊後高田市田染路	安山岩・県指定
仁治4年 (1243)	富貴寺阿弥陀三尊種子笠塔婆	大分県豊後高田市田染路	安山岩・県指定
寛元3年 (1245)	滝尻王子社笠塔婆	和歌山県田辺市中辺路町栗栖川	花崗岩
建長5年 (1253)	聖衆來迎寺笠塔婆	滋賀県大津市比叡辻	花崗岩
弘長元年 (1261)	般若寺笠塔婆	奈良市般若寺町	花崗岩・国重文
文永5年 (1268)	富貴寺不動種子笠塔婆	大分県豊後高田市田染路	安山岩・県指定
文永5年 (1268)	富貴寺釈迦三尊種子笠塔婆	大分県豊後高田市田染路	安山岩・県指定
文永5年 (1268)	富貴寺阿弥陀三尊種子笠塔婆	大分県豊後高田市田染路	安山岩・県指定
文永5年 (1268)	紅巖寺跡笠塔婆	群馬県伊勢崎市宮子町	角閃石安山岩
文永7年 (1270)	勝福寺笠塔婆	奈良県御所市西寺田	花崗岩
文永9年 (1272)	西誓寺笠塔婆	奈良県磯城郡田原本町大字法貴寺	花崗岩
文永11年 (1274)	十輪寺笠塔婆	京都府木津川市山城町平尾ノ辻	花崗岩
弘安7年 (1284)	暗峠笠塔婆	東大阪市豊浦町	花崗岩
永仁3年 (1295)	西明寺笠塔婆	京都市木津川市加茂町大野	花崗岩
永仁7年 (1299)	小原辻堂墓地笠塔婆2基	奈良県宇陀市室生区小原	花崗岩・市指定
正安元年 (1299)	天引笠塔婆1	群馬県甘楽郡甘楽町天引	砂岩(天引石)・県指定
正安元年 (1299)	神護寺下乗笠塔婆	京都府京都市梅ヶ畑高尾町	花崗岩
正安4年 (1302)	天引笠塔婆2(2月25日銘)	群馬県甘楽郡甘楽町天引	砂岩(天引石)・県指定
正安4年 (1302)	天引笠塔婆3(3月9日銘)	群馬県甘楽郡甘楽町天引	砂岩(天引石)・県指定
正安4年 (1302)	天引笠塔婆4(3月23日銘)	群馬県甘楽郡甘楽町天引	砂岩(天引石)・県指定
正安4年 (1302)	本願寺石造笠塔婆	京都府京丹後市久美浜町	花崗岩
乾元2年 (1303)	談山神社摩尼輪塔	奈良県桜井市多武峯	花崗岩・国重文
乾元2年 (1303)	大円釈迦堂阿弥陀三尊笠塔婆	大阪府豊能郡豊能町切畑	花崗岩
延慶4年 (1311)	圓教寺石造笠塔婆	兵庫県姫路市書写	流紋岩・県指定
正和5年 (1316)	一乗寺笠塔婆	兵庫県加西市阪本町	流紋岩・県指定
元応2年 (1320)	西明寺町石笠塔婆	滋賀県犬上郡甲良町池寺	石材不詳
元亨2年 (1322)	長岳寺笠塔婆	奈良県天理市柳本町	花崗岩
元亨2年 (1322)	高山寺石水院笠塔婆	京都市右京区梅ヶ畑梅尾町	花崗岩・重要美術品
嘉暦2年 (1327)	如来院笠塔婆	兵庫県尼崎市寺町	花崗岩・市指定
元弘3年 (1333)	龍門寺跡下乗笠塔婆	奈良県吉野郡吉野町山口	花崗岩

富貴寺には5基の石造笠塔婆があり、最も古いものが国宝富貴寺大堂の手前東南部に立っている。笠の軒口は薄く、緩やかに反り返り、上部に露盤を刻み出し、一体となった宝珠と請花を載せる。塔身は下後部が膨れた自然石の全面を平らに削り土中に深く埋められている。正面上方にキリーク（阿弥陀如来その下左右にサク（勢至菩薩）とサ（観音菩薩）を刻み、阿陀三尊を構成



している。塔身下部の中央に「仁治二年（1241）辛丑八月十二日」、右側下部に「造立者広増」、左側下部に「岸第二日」と刻む。他の4基の石造笠塔婆もほぼ同様な造形でいづれも造立者広増の名が刻まれている。

奈良市般若寺町の般若寺笠塔婆は花崗岩製で、南塔と北塔2基ある。それぞれ上から宝珠、請花、伏鉢、笠、竿（塔身の各部材で構成され、笠の軒反と宝珠の形は鎌倉中期の様式で笠の軒裏は一重の垂木型と四隅に隅木、それに塔身を受けり出しを刻み出す。南塔は全高446cmあり、正面上部に蓮華上の月輪内にバク（釈迦如来）、その下左右にアン（普賢菩薩とマン（文殊菩薩）を刻み、その下に胎藏界五仏の種子を彫り最下部に建立の経緯を伝える刻銘がある。また、背面上部にはア（胎藏界大日如来）、その下に光明真言を二行に分けて刻み、右側面には法華經安樂行品の偈、左側面に涅槃經の偈を彫っている。北塔は高さ476cmあり、正面上部に蓮華座上の月輪内にキリク（阿弥陀如来）、その下左右にサク（勢至菩薩）とサ（観音菩薩）、その下に金剛界五仏の種子を刻み、最下部に南塔の刻銘の続きを刻む。背面上部にはア（胎藏界大日如来）、その下に大随求陀羅尼小呪を刻む。この2基の石造笠塔婆は、弘長元年（1261）に伊行吉が亡父伊行末の一周忌にあたって、1基は亡父の菩提を供養ため、1基は存命中の母の後世のために建立したものである。なお、伊行末は東大寺大仏殿の復興に寄与し、花崗岩等の硬質石材加工技術を宋からもたらした石工で、伊行吉は行末の嫡男であった。本来、この笠塔婆は般若寺南方の五三昧という南都の惣墓の入口にあったが、明治の廃仏毀釈で廃棄され、明治25年（1892）に般若寺境内に移されたもので、現在は国重要文化財に指定されている。

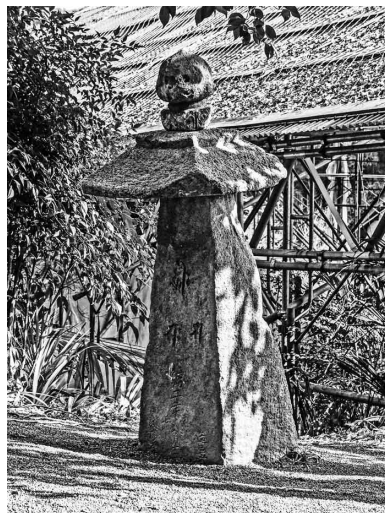
木製笠塔婆から石造笠塔婆が派生したと考えられるが、それと同様に木製笠塔婆が大型化して傘型堂宇へと発展したと推測されるのである。

### （3）趣向としての傘亭

傘型建造物は本来は宗教施設として建立され、近世から近現代にかけても建造され続けてきたが、近世になると、茶室や四阿のような趣味的な建物として建てられるようになる。

#### ①高台寺傘亭

京都市東山区河原町の臨済宗建仁寺派の高台寺には、国指定重要文化財の傘亭が、時雨亭と隣り合って境内東端の



富貴寺阿弥陀三尊笠塔婆



般若寺笠塔婆



高台寺傘亭外観

小高い場所に建っている。伏見城の遺構と伝え、桃山時代の茅葺き宝形造の平屋建ての茶室である。室内には天井がなく、丸太と竹で組まれた扇垂木状の化粧屋根裏を見ることができる。一本通った丸太の梁の中央に束を立て、竹垂木が束の頂点に収束しているため、傘を下から見上げたような姿をした化粧屋根裏になっており、これにちなんで傘亭と名付けられたという。本来この茶室は安閑窟という名称で、束木には「安閑窟」と書かれた額を掲げている。入口は時雨亭側に向いた土間廊下の下側の東南隅と西面中央の2カ所にある。西面の入口は扉が上下に分かれ、上扉は小竹詰打ちの揚戸で、藪戸のように室内に跳ね上げて釣り木で留め、下の板戸を右側に引き込むという珍しい造りになっている。安閑窟は中心となる束から広がる扇垂木の形から傘を連想させ、この内部造作を特徴とした茶室建築といえる。



高台寺傘亭内部

## ②縮景園の看花榻

広島市中区鞆町の縮景園に、看花榻かんかとうと呼ばれる円亭（傘型四阿）が建っている。縮景園は初代広島藩主浅野長晟（1586-1632）が元和6年（1620）から築成にとりかかった別邸泉水屋敷が起源で、武将で茶人の上田主水正重安（宗箇）が作庭し、大名庭園の築園では最初期の作であるという。しかし、宝暦8年（1758）の広島の大火によって縮景園は甚大な被害を受けた。そこで、七代藩主浅野重晟（1743-1814）は園域を拡張して建物を復旧し、京都の庭園師清水七郎右衛門を招き、天明3年（1783）から天明8年（1788）にかけて、池泉回遊式庭園へと大改修を行った。これによって現在の縮景園の姿はほぼ完成し、この時に看花榻も建てられた。このように由緒ある大名庭園だが、昭和20年8月6日の原爆投下によって、壊滅的な被害を被り、看花榻も倒壊してしまった。しかし、昭和24年（1949）から縮景園の復旧が始まり、昭和49年（1974）に完成し、看花榻も昭和43年（1968）に再建された<sup>(8)</sup>。



縮景園看花榻

看花榻は西側の園中央の濯纓池と東側の太田川の支流を見下ろす臨瀛岡りんえいこうに建てられている。看花榻の榻は腰掛けを意味し、かつては下部の腰掛け部が回転するように造作されていた。現在の看花榻は茅葺き八角宝形造りの屋根を持ち、屋根上に陶器の大鉢を逆さに載せている。中心となる一本柱は直径約30cmの杉材で、杉皮を巻き付けて棕櫚縄で縛り、風雨から保護している。柱上部から24本の丸太を扇垂木状に広げ、柱の高さ約2.4mの部分から丸太の支柱8本を斜め上に延ばして八角形の支えの梁を支持し、そこに垂木を載せる構造である。腰掛け部も八角形で、板床を張っている。寸法は全高約4m、屋根径約3.2m、軒先高約2.4m、腰掛けの高さ約40cm。江戸中期の大名庭園では、休憩用に傘型四阿が設けられるようになっていたのである。



### ③兼六園と金沢城の傘型四阿

石川県金沢市にある兼六園には避雨亭<sup>ひうてい</sup>と呼ばれ傘型の御亭<sup>おちん</sup>(四阿)が建っている。兼六園は延宝4年(1676)に加賀藩5代藩主前田綱紀が、金沢城に面した傾斜地に建てた別荘の蓮池御殿の周囲に造成した庭園が始まりである。天保13年(1837)、13代藩主前田斉泰(1811-1884)が霞ヶ池を掘り広げさせ、その排土を用いて栄螺山を築いた。高さ9m、周囲90mの築山で、本物のサザエの殻とは逆に左上がり螺旋状に登る坂道があり、それがサザエの殻に似ているというので、栄螺山と名付けられた。また、最頂部に傘型建造物の避雨亭があるため、通称唐傘山とも呼ばれている。避雨亭直下西側の穴太積みの石垣は、緩みが進行してきたため、平成20年(2008)から平成21年にかけて改修され、同時に避雨亭も修理された。柱は根入れ部分が腐朽していたために新材で復旧し、垂木や屋根下地などの一部骨組みの損傷部分を修繕した。

避雨亭は銅板葺きの円形屋根で、その直径は2.1m、全高2.1m、軒の高さ1.4mで、腰掛け部分はない。柱の上に24本の垂木を放射線状に配置する。中心の円柱は直径18cmのケヤキ製である。修復工事報告書によれば、安政3年(1856)の古絵図では避雨亭を図示していないので、明治以降に設置されたものと推定している。また、明治末期から大正初期の古写真から、時代の変遷とともに形状を変えているという<sup>(9)</sup>。



兼六園の避雨亭

現在の兼六園螺山の避雨亭は明治期の設置らしいが、金沢には近世まで遡る傘型四阿が存在した。兼六園には瓢池の翠滝の西側にも傘型四阿がある。元は金沢城玉泉院丸にあったカラカサと呼ばれた御亭だが、明治期に玉泉院丸庭園が廃絶された時に、瓢池の傍らに移設されたという。この玉泉院丸庭園は、二代藩主前田利常(1594-1658)による寛永11年(1634)の作庭に始まった池泉回遊式の大庭園である。天保3年(1832)、12代藩主前田斉泰(1811-1884)が、玉泉院丸庭園にカラカサ(亭)の設置を命じている。平成20年(2008)から始まった5年掛かりの発掘調査によって玉泉院丸庭園の遺構は明らかとなり、平成25年(2013)からの復旧工事は平成27年(2015)に竣工し、同時にカラカサも復元された。瓢池の傍らのカラカサ(亭)は柿葺き屋根を持ち、全高は2.4m、屋根の直径は2.7mある。このカラカサの柱下部周囲には円形の腰掛け設置されている。

この他に二之丸御殿にもカラカサ(亭)が存在したという記録が残されているという。

### ④旧赤穂城の傘亭

兵庫県赤穂市の赤穂城跡は、正保2年(1645)に常陸国笠間から移封された浅野長直が築いた城郭で、本丸と二の丸に江戸初期に作庭された池泉回遊式庭園がある。浅野家断絶後、赤穂城は森氏の居城となり、廃藩置県後には民有地となっていたが、昭和46年(1971)、国史跡に指定されてから発掘調査・整備復元を進め、二之丸庭園では平成24年(2013)に傘亭を復元した。傘亭は八角錘状の茅葺き屋根で、最頂部に陶器の大鉢を被せ、柱下部には八角形の腰掛けを設けている。

### ⑤近現代の傘型四阿

明治以降、都市公園が各地に造成されるようになる。中には大名の池泉回遊式庭園の系譜を引く公園があり、休憩や雨宿り、そして公園としての雰囲気作りのために傘型四阿を設けることがあった。



東京都江東区の都立清澄庭園は、明治13年（1880）に三菱財閥創業者の岩崎弥太郎が下総関宿藩の下屋敷跡地に回遊式林泉庭園として造築した深川親睦園が始まりである。大正12年（1923）の関東大震災によって建物は焼失して庭園も被害を受け、翌年に三菱3代目社長岩崎久弥は東京市に庭園の東半分を公園用地として寄贈した。東京市は大正記念館の移築と深川図書館新館建設などを整備して昭和7年（1932）に清澄庭園として開園した。そして、東京都は昭和48年（1973）に西半分の敷地を購入して、昭和52年（1977）に追加開園した。清澄庭園の千山亭（傘亭ともいう）は当初は木造だったが、昭和7年にコンクリート製擬木支柱に造り替えられた。しかし、平成23年（2011）3月11日に発生した日本大震災によって、傘部の亀裂や柱の傾きが生じたため、平成24年（2012）1月に撤去された。なお、この地は紀伊国屋文左衛門の伝説伝承地で、千山亭の名は文左衛門の雅号千山に由来するという。

神戸市須磨区の須磨離宮公園は、西洋式庭園の本園と植物園とで構成され、大正3年（1914）に竣工した旧武庫離宮を淵源とする都市公園で、造園家福羽逸人（1856-1921）が庭園設計を担当した。大正3年に建てられた須磨離宮傘亭は、青銅鑄造製擬木の一本柱で竹穂葺六角屋根という特徴ある傘形四阿舎だったが、昭和20年（1945）3月17日の神戸大空襲で多くの建物と共に焼失し、鑄造師岡崎雪聲（1854-1921）の制作した青銅製の柱だけが焼け残った。しかし、傘亭復元の市民運動が平成18年（2006）から始まり、神戸大学建築学教室の協力を受けて、平成23年（2011）に復元された。



須磨離宮公園の傘亭

この近代庭園における傘亭の建造以後、各地の公園などに傘型四阿が建てられるようになる。昭和3年（1928）に開園した東京都文京区の区立大塚公園、昭和38年（1963）に着工開始された大阪府堺市の大仙公園内の日本庭園の傘亭、平成4年（1992）に開園した兵庫県姫路市の姫路城好古園花の庭の四阿、札幌市厚別区の厚別西さつき公園のあづま屋などである。

## おわりに

平安後期には成立していたと思われる木造笠塔婆から、平安末期には石造笠塔婆が分岐し、鎌倉期には傘型堂宇へと発展し、その後も造り続けられた。ところが、江戸期になると、大名庭園の趣味的な建造物としての傘型四阿が出現し、現代では公園でも設けられるようになった。中世的な宗教観から成立した傘型堂宇は、近世になると、その形の面白さから庭園における傘型四阿にまで変化していったのである。この小論では、傘型建造物の造立理由を明確にして、その時代的な変遷が存在することを明らかにすることを目指したが、幾分かはできたのではないかと考えている。諸氏の御指導と御鞭撻を頂ければ幸いである。

## 【参考文献】

- ・『古事類苑32』『器用部二十三行旅具中』神宮司庁・1911年：吉川弘文館・1970年。
- ・『傘堂』奈良県教育委員会・1988年。

【注】

- (1) 本渡章『図典「大和名所図会」を読む』創元社・2020年。
- (2) 暁鐘成『雲錦隨筆』1862年(国文学研究所オープンデータ)。
- (3) 『大和志料下巻』奈良県・1914年(国立国会図書館デジタルコレクション)。
- (4) 『吉舎町史』吉舎町教育委員会(広島県双三郡・現三次市)・1988年。
- (5) 『総領町史』総領町・1994年。
- (6) 『吾妻鏡』新訂増補国史大系・黒板勝美・国史大系編集会編・吉川弘文館・1932年。
- (7) 『千田北遺跡笠塔婆説明会資料』金沢市埋蔵文化財センター・2019. 2. 17。
- (8) 『縮景園史』広島県教育委員会編集・広島県教育委員会・1996年。
- (9) 『特別名勝兼六園栄螺山石垣等修復工事報告書』石川県金沢城・兼六園管理事務所・2012年。